

- 1) 他方に避けさせて、自分は避けたくない、
- 2) 両方避けなければ大破局 (カタストロフィーという) となる、というもの。

さらに言い換えれば、共通の破局を避けるために必要な行動を互いに相手に押し付けあうというものである。

このゲームは最近注目され、応用も多い。次にいくつか応用例を挙げておこう。

a) 2つの核大国が互いに相手をひるませて屈服させようとし、両方もそうせず、大核戦争で、「地球の終わり」という悪夢のシナリオ (核対決)。

b) 堤防が決壊しそうだが、その地点が2つの市にまたがっているため、両市とも相手の市に補修を押し付けあっているうちに、

秋の台風シーズンとなり、ついに決壊。両市とも大被害という公共財供給の問題 (公共財のシナリオ) 規制緩和も「チキン・ゲーム」の要素がある。少し考えればわかるが、「権力」を持つ側が自分から権力を放すなどは権力の本質に反し、自然というよりむしろ不自然である。そうでなく、実は、規制緩和は権力闘争なのである。宅急便 (クロネコヤマト) の発案者は、おそらく郵便法違反ストレスのチャレンジであったろう。わずかの違反の摘発を恐れるなら断念するほかになく、そうなれば規制緩和にはならない。あくまでゴーなら、規制当局は違反 (の疑い) の摘発か規制自体を緩和するか、判断を迫られる。宅急便が存在することは、後者、規制当局が追い込まれたことに他ならない。

【町田 幸雄】

「はい！わかりました・・・」 ＝トライアスロンから得たもの＝

私がトライアスロンと出会って、私の人生は少しだけ変わりました。

私がトライアスロンを始めたのは、今から 25 年も前のことです。

そのきっかけとは、ほんの僅かな好奇心と「やるだけやってみようか」という僅かなプラス思考と「もしかしたら良い結果が出せるかも知れない」という期待感でした。

当時、問題になっていた生の牡蠣を丼一杯大量に食べて A 型肝炎になり、1 ヶ月入院した肥満体質の私に、主治医が「運動をしないと脂肪肝になるから、何か運動をなささい」と勧めた。

週一回のスイミングスクール通いでは、全く減量効果は出ず、片道 17.5 km の通勤を自転車にして通い始めた。慣れると結構スピードが出るので身の危険を感じて、ヘルメットを買いに寄った自転車屋さんで競技用の自転車を勧められ、自転車とヘルメットを買ったのが、そもそもの始まりです。

その時、店の親父さんに「水泳をしているのなら、トライアスロンに出てみないか」と言われた。自分は走るのが嫌いでもそんな気は全くなかったが、執拗な誘いに乗り「はい、わかりました」と出場した四国香川県丸亀市で開催された大会が、私の最初のレースとなった。

その後幾度となくレースに出場していたある年、日本トライアスロン協会が審判員の養成研修並びに試験を隣の山口県で開催するので、広島県トライアスロン協会として誰か受講しないかということになった。どこからとなく「谷口さん受講してくれないか」と言う話が湧き上がり、「はい、わかりました」と受けた試験に合格し、広島県で初のトライアスロン審判員資格を取得した。

トライアスロンの全国組織も、当時トライアスロン連盟とトライアスロン協会があったがトライアスロン連合に統一され、審判員も第 3 種審判員へと名称変更となった。トライアスロン大会も徐々に増え始め、大会運営において審判員の需

要が高まり増員を余儀なくされた。トライアスロン連合本部より第 3 種審判員を育成・教育するために、第 2 種審判員資格を受験して欲しいと県協会に要請があり、審判資格を早くから取得していた私に、又もや声がかかり、「はい、わかりました」と受験した。

試験は審判規則教本に則った筆記試験と実際の大会で実技試験が行われ、何とか合格することが出来た。

その頃から、全国の大会へ審判員として派遣されることが増え、自分自身の競技と大会運営の一員としての審判業務で、夏場は毎週どこかの大会に顔を出していた。

審判業務も全国大会、国内選手権大会、ワールドカップ、世界選手権ともなると、それまでにはなかった問題に遭遇する。

このようなことから大会審判長に従事する資格を、従来の第 2 種審判員から、あらゆる難解問題に対応できる能力を有する第 2 種上級審判員資格を作ることになった。



1992 World 広島大会

ローカルな大会においては、参加目的が「自己への限りない挑戦」という鉄人レース完走を目指している方が殆どであるが、選手権クラスの大会ともなると選手の目的は変わり、1 分 1 秒を争い、選手も違反すれすれの競技でせまってくる。そこで待ち受けているのが、審判としての裁定である。今までは競技ルールに則り判断していたものが、ルールにも載っていないような事例を眼前に叩き付けられ、瞬時に結論を求められるのである。

世界を目指す競技者たちは、選手もコーチも競技に対する視点も取り組みもハイレベルで、当然審判員に求められてい

るものがローカルの大会と異なり、どちらに転んでも不適と思われる解答の中から、正当な理由を付けて選手に突きつけるのである。日頃から弛まぬ理論武装の訓練が、最も意義ある重要なトレーニングとなり、選手が必死に猛練習に励むなら、それ以上に第 2 種上級審判員には最低限完璧な審判知識と審判技術の能力が求められる。

第 2 種上級審判員の資格試験は、面接と論文である。論文は問題を自分で提起し、そのことを考察し、結論を導く、まさに臨床検査の道と同じである。

要するに、答えの無い問題を解く能力と、問題を見つけ出す能力を兼ね備えた人物を必要としているのである。1 回目の挑戦では見事に失格となった。趣味の世界でもここまでやるのか、という思いを募らせながら必死に書いた論文が見事に当たり、2 度目の挑戦で試験に合格することが出来た。

第 2 種上級審判員免許を取得した直後、ニュージーランドへ若手選手を連れて行って来てくれないかという依頼があり、すぐさま「はい、わかりました」の一言で、Gisborn 市への派遣となった。大学生を連れての訪問となり、市長への表敬訪問や大会参加と大変スケジュールの詰まった 10 日間となったが、ホームステイで過ごした NZ 生活が、その後の自分の人生を変えようとは夢にも思わなかった。

誰にもチャンスは同じようにある。しかしそれをチャンスと思うか否かは本人次第である。

ただ、拒むことなく受け入れただけで、人生は大きく変わっていく。 <了>



2008 さぎしま大会

【谷口 薫】